

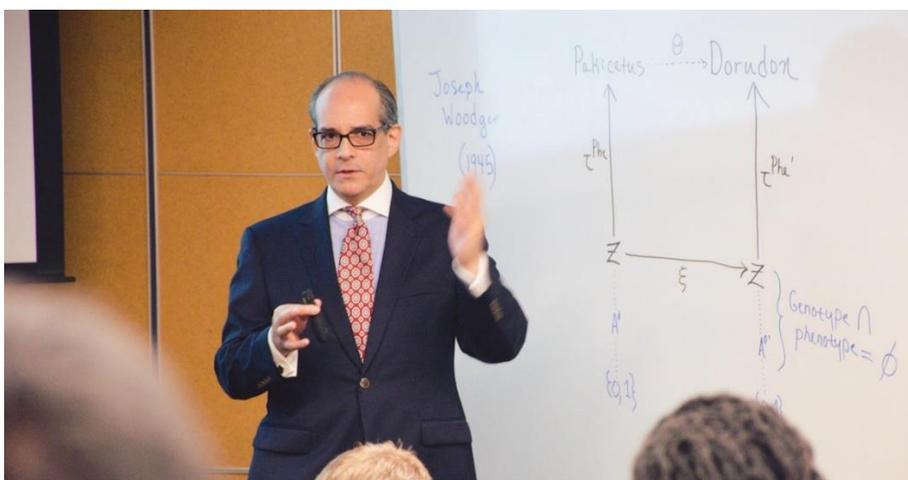
リチャード・スターンバーグ：ID 理論「プラトン主義者の目を通じて」

Greatchain
2019/09/25

インテリジェント・デザインには、さまざまな立証の方法がある。「科学の蜂起」というイベントの講師の一人として、Richard Sternberg 博士が、プラトン主義者の立場から、「**非物質的ゲノム**」Immaterial Genome という概念を立てて、講義している。それがどういう意味か、私の考えるところを簡単に述べてみたい。最初に David Klinghoffer の次の紹介と解説を引用し、それを敷衍する形で説明を試みることにする。私は素人にすぎない。お前の考えはおかしいではないかと思われる方は、ご指摘いただけると有難い。

ID the Future のこのエピソードでは、Biologic Institute の研究員、リチャード・スターンバーグ博士が、彼の数学的／論理的な仕事について話している。それは遺伝子を、純粹に物的現象として見るのが、困難であることを説明し、DNA は、生物の発生を指令するのに必要な、すべてのものを持ってはいないと言っている。

彼は、数学は、細胞の中で起こっていることの計算可能性に、ギャップがあることさえ示しており、そのことは、生物がどれくらい機械に似ているか、あるいは似ていないか、それらがどれくらい進化可能か、また人工的生命が可能か否かに、光を当てるものだと言っている。



「私はプラトン主義者の目を通じて宇宙を見ている」と、理論生物学者リチャード・スターンバーグは、新しい ID the Future のエピソードで、司会者 Beatris Rusu と話しながら言っている。スターンバーグ博士は、インテリジェント・デザインについて、最も魅力ある思想家の一人であり、デザイン理論についての彼自身の理解を、プラトンの対話編『ティマイオス』（『国家論』か？）にまで遡っている。Rusu は、彼の最近の ID についての講義を、ディスカバリー研究所のサマー・セミナーで、彼と話し合った。

スターンバーグの研究の主なテーマは、彼の 6 つの一連の論文によって把握すべき、「非物質的（霊的）ゲノム」と彼が呼ぶもので、それは、DNA の生物学的情報と我々が言っているものの物的ソースを、完成されて活動する細胞または生命体から、切り離した「データ内容のギャップ」として現れるものである。すなわち、「発生を説明するには、DNA 配列だけでなく、そこに加えられた何か別のものがなければならない。」このことに含まれる意味の一つは、通常のダーウィニズムの説明——進化が、変異と選択というプロセスを通じて、生物学的複雑性をつくり出すという説明——が不完全なだけでなく、ひどく無能であるということだ。

「それは不気味（幽霊のような）とも言えるが、我々はこれを、論理的・数学的な根拠に基づいて知ることができる」と、彼は言っている。——引用ここまで

スターンバーグの「非物質的（霊的）ゲノム」という言い方は、少しわかりにくいかもしれないが、私はこれ（細胞や生命体の出現）を、次のような比喩によって説明することもできると思う：——

ある別の天体から、地球へ初めてやってきた科学者がいたと仮定しよう。彼らは、地球人が「聖書」と呼ぶ物体が、彼らを感じさせ崇拜させることを不思議に思い、これを解明しようとする。この物体は、黒いインキのシミのついた紙を束ねたものである。このシミは規則性をもっていて、(英語の場合) 26 種の形しかない。それはいくつか集まって単位を作っているが、それ無限でなく、辞書にある以外のものはない。それは単語というもので、よく見るとそれは句をつくり、また文章の切れ目をもっている。さらによく見るとそれは統語法（文法）という規則性に従っている。そこまでは、物理的・機械的なものである。

しかし彼ら異星人は突然、それが、その物的・機械的なものを使って、意味を生成していることに気づく。そしてその意味は、機械的なものの延長として出てきたのではなく、別の所から来たもので、人間のように生きている。「聖書」というモノの本質は、その物質性にあったのではなく、物質性の断絶したところに忽然と現れた、非物質の意味にあった。

この断絶をスターンバーグは、「データ内容のギャップ」と呼び、忽然と現れた意味を「非物質的ゲノム」と言っているのだろう。

プラトンの有名な「洞窟の比喩」は、馬鹿げた現代の唯物論者をたしなめるのに、今でも役に立っている。我々は洞窟の奥に映る影絵を見ながら、首を動かさず縛られたまま、それだけが世界のすべてだと思って生きている。そしてその世界に、我々の根源も存在理由も含まれている、と唯物論者は考えている。

その影絵の世界は、一応首尾一貫しているように見える。しかし、「一つの体系は、それ自身の意味や存在理由を、その内部に含むことはできない」という〈ゲーデルの定理〉Goedel's Theorem と呼ばれるものがある。我々は、自分がなぜ生きているのかを知らず、それは我々より上位の存在者に尋ねるより方法がない。それが宗教の意味である。しかし、この事実を真っ向から無視して、洞窟の外に出てみようとしなない者たちがいる。ユージェニー・スコットという、アメリカの有力なダーウィニストは、「我々はこの自然界を調べているのに、なぜ超自然を持ち込む必要があるの?」と言った。そして、この同じ女性が、「進化論はダーウィンでなければならない。会社だって方針というものがあるでしょう」と、恐るべきことを言った。

人間は何のために生きているのか？ それは快樂を増やすこと以外にないでしょう——と堂々と答える人はまずいないであろう。しかし、そう答える若者がどんどん増えていっても、何の方策もなく、それどころか、自分で考えることを禁止するのが、我々の無神論・愚民教育文化である。

——以上